

国語科

確かな学びを支える国語科学習の授業と評価

栗田稔生 島末智成

はじめに

今年度は、国語科の研究テーマを「確かな学びを支える国語科学習の授業と評価」として、国語科の学習からみた「学びを支える力」とはどのようなものなのかについて研究していくことと、「学ぶ力」を育むための授業と評価について研究していきたいと考え、実践を積んできた。そこで、この国語科から見た「学びを支える力」のなかで、明らかになったことと、「学ぶ力」を育むための授業と評価についてふりかえってみることにする。

1 国語科からみた「学びを支える力」

国語科の学習のみならず、子ども達の生活の中で行われている「話す」「聞く」「書く」「読む」などの活動には、以下のような活動がある。

例えば、「みんなのほうを向いて話をすることや、「話を聞くときには、話をしている人のほうを向き、話の途中に口を挟まない」、「伝えたい相手に伝わる声量で話す」などの活動である。このような活動は、どの学習でも行われることであって、6年間を通して、大切にしていかななくてはいけない「学びを支える力」として考えた。つまり、「学びを支える力」を子どもたちの生活面や学習面での基盤と考えたのである。

そこで、このような「学びを支える力」を育みたいと思い、2年生では、音読を学習の中心に据え、日々取り組んできた。「言葉を声に出すこと」を「学びを支える力」

として考え、その力を育もうと考えたのである。

具体的には、詩の音読の時間と、教材を読む時間を長めにとる学習を繰り返していった。子ども達の様子を見ると、日々、詩を読んだり、教材文を音読することによって、ずいぶんと声を出すことに自信を持った子が増えてきたように思われる。

| | |
|--|-------|
| 年度末に行った声を大きく出せるようになったと思うというアンケートに対して「そう思う」と答えた人の割合 | 94.7% |
|--|-------|

以上の結果が示すように、言葉を声に出すという「学びを支える力」は、指導者が継続して「言葉を声に出す機会」を増やすことで成果があったと考えられる。

それと同時に、課題も見つかった。それは、国語科の学習を進めていく中で、「学びを支える力」と「学ぶ力」を厳密に区別できないということである。

研究を始めた際は、「学びを支える力」と国語科独自の「学ぶ力」は、区別して考え、国語科の授業を設定しようとした。

ところが、実践をしていく中で、音読一つをとっても、ただ「言葉を声に出す力」だけを育てているのではなく、場面の様子や登場人物の心情などを読み取るという力も育むことになっていることがわかった。

このように、他教科の学習の中で、必ず用いられる「話す」「聞く」「読む」「書く」活動を学習していく国語科の「学ぶ力」と学習や生活を支える「学びを支える力」は、深く関わっているというよりも、重なって

いる部分が多いと言えると考えられる。

今後は、国語科の学習で学んだ「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」での学習の成果を他の学習で生かしていくことを指導者が共通理解していくとともに、子ども達自身が意識できるようにならなくてはならないと考えている。

2 「学ぶ力」を育むための授業と評価

国語科の学習を充実していくことで、国語科の学習からみた「学びを支える力」と「学ぶ力」は育んでいくことができる。また、この2つの力は重なっている部分も多く、同時に育んでいくこともできると考えている。

今年度は、国語科の学習を充実させる上で、指導者として留意すべき項目を2つ考えた。1つめは、日常行われているような「言葉を使った話す・聞く・書く・読む活動」を国語の力としてとらえなおし、国語科の学習に生かしていくこと。2つめは、国語科の学習の中に、子ども達同士の学び合いを取り入れていくことであった。そこで、この2つについてふりかえることで、「学ぶ力」を育む授業と評価について成果と課題について考えたいと思う。

(1) 日常行われている言葉を使った『話す』『聞く』『書く』『読む』活動を国語の学習としてとらえなおすこと

例えば、朝の会などに継続して取り組まれるスピーチタイムなど考えてみる。

この活動を自分の経験や思いを交流しあう「話すこと・聞くこと」の実践として考えて取り組んできた。

話す人の声量を取り上げると、2年生では、クラスみんなに聞こえるようにお話をすることによって重点を置いて指導していった。この段階を経て、中学年では、伝えたい相手を意識した声量で話すことに重点が移っていくし、高学年では、伝えたい

相手だけではなく、伝えるべき内容や目的によって声量を変えて話すということに重点が移っていくと考えている。

年度末の段階で「クラスみんなに聞こえるようにお話ができる」と評価した人の割合
80%

これらの指導は、「国語科から見た学びを支える力」の項でも記述したように、継続して取り組むことで成果が得られると考えているので、今後も引き続き取り組んでいく必要があると考えている。

(2) 国語科の学習の中に、子どもの学び合いを取り入れていくこと

少人数の学習形態による「学び合い」

今年度は、昨年度の成果をふまえて、より子ども達の学習を深めていくためにも、学習の中で「交流」や「少人数での学習形態」を積極的に取り入れていった。これらの「交流」や「少人数の学習形態」は、子ども達同士の「学び合い」による学習を目指していくことにした。

具体的には、単元の学習内容や子どもたちの学習状況に合わせて学習形態を工夫していった。つまり、目的別のグループや、指導者の評価をもとにしたグループなどを用いて学習を進めていく学習形態にしていくことである。



図2-1 昔話の読み方の交流

この写真では、昔話をどのように工夫して読んでいくのかを指導者の評価をもとにしたグループ内の交流で考えているところである。4人グループを作り、前時までの評価で「工夫して読んでいる子」2人と「もう少し工夫をして読んだ方がいい子」2人をひとつのグループとして学習を進めている。この結果、このグループでは、全員が、昔話の全体ではないにせよ、「会話文」に工夫をして読むようになっていった。このような、学び合いをすることができたと考えている。



図2 - 2 提案班の学習形態

この写真は、4年生の学習の中で教材「一つの花」を使って、提案班の提案をもとに読み取りの学習をしているところである

この提案班学習では、一読後に子どもたちがもった疑問を出し合い、自分たちで精選し、残った課題の中から自分たちの取り組みたい課題を選んで班を決めていくことにしている。そして、班ごとに課題について学び合い、自分たちの考えをみんなに提案していく授業形態なのである。

つまり、提案班を作る際には、事前の読み取りの評価結果をもとにしたメンバー構成をするのではなく、あくまでも自分自身の課題をもとに班を構成し、その班の中での学び合いを大切にしているのだ。

中学年の子どもたちは、自分や友だちの考えの良さを客観的にとらえたり、自分の

考えと友だちの考えとの相違点や共通点を見いだしたりすることができるようになってくる。だからこそ、この時期には、単元の中で自分の考えをしっかりと見つ場面と、自分と友だちの考えや思いを交流する場面を大切にしなければならないと考えた。この提案班の実践では、学び合いを学習の中に取り入れていったことが、子ども達の読み取りを深める結果につながったし、子ども達どうしの中で、課題を解決しながら、読み取りを進めていくことに効果があった例である。

このような「学び合い」を大切にしたい学習では、以下のようなことに指導者として留意したいと考えている。それは、仮に、課題の定着や発展を意図する学習になったとしても、定着をめざした学習については、指導者が、違う課題を与えて、課題解決に導くことはしないようにする。また、発展的な学習についても、課題を与えて、より難しい課題解決をめざしていくことはしないようにするということである。あくまで、子どもたち自身の考えを大切にしていきたい。

つまり、自分自身で解決をしないことを考えている子も学び合いの中で課題を解決していくことをめざすし、課題を解決してしまった子も、学び合いの中で、もっと自分らしくより豊かな表現をめざしていくという考え方である。

なお、これらの学習は、本校の国語科のカリキュラムに位置付いているものであり、教師間の共通理解のもと、各学級で実施されている。それなので、先ほどの例で言えば、国語科で考える「学ぶ力」であると同時に「学びを支える力」であるとも言えるのだ。

情報機器を活用した学び合い



図 2 - 3 子ども達の活動を撮影



図 2 - 4 パソコンを使って視聴

以上の写真は、ビデオカメラとパソコンを使って、自分たちの音読をふりかえった2年生の実践である。

この学習では、子ども達がお互いの音読を見ることによって、自分の音読を確かめられた。

例えば、「話す」「聞く」「読む」という活動は、「書く」活動に比べると、自分自身をふりかえるための材料が乏しく、自分の姿を自分自身で確認することが難しい。そのような学習を扱っている国語科だからこそ、「話す」「聞く」「読む」活動でも、自分をふりかえることができるようにしていく必要がある。そのために、これらの情報機器を活用できないかと考えている。

おわりに

国語科から見た「学びを支える力」と、「学ぶ力」を育むための授業と評価について考えてみた。

成果としては、「学びを支える力」と「学ぶ力」が大きく重なっていることが明らかになったことと、日常行っている活動も国語科の学習として捉え、指導していくことで、成果があがること、また、「学び合い」を積極的に取り入れていくことで学習に成果が上がるということが挙げられる。

課題としては、以下のようなことが明らかになってきたと言える。

子ども達が自分たちがやっている学習の成果を自分自身で意識できるようにすることである。つまり、自分の学習状況や自分自身の課題について、自らが意識していく必要があると考える。そのための一つの手段として、今年度取り組み始めた情報機器の活用などが考えられる。また、「学び合い」によっても、友だちからの言葉で自分をふりかえることができると感じている。

これらのことを意識した授業を積み重ねていくことによって、「今ある自分そのものを大切にしながら、言葉を使った『話す』『聞く』『書く』『読む』などの言葉を大切に活動を通して、他者と関わり、表現したり、取り入れたりすることによって、さらに自分の内にある思いや考えを豊かに自分らしくしていこうとするとともに、人間関係をも豊かにしていこうとする」子、つまり表現愛を発揮している子どもが育まれることになると考えている。

栗田稔生 島末智成